名古屋外国語大学論集　第11号　2022年7月

翻　訳

閉会のことばにかえて[1]

Antoine CULIOLI, “En guise de clôture” (Trad. Jap. Tatsuya ITO)

アントワーヌ・キュリオリ著　伊藤達也訳・註
Antoine CULIOLI　Tatsuya ITO

6時20分、私は特別に残酷な状況に置かれています。もし5分で閉会のことばを述べれば私は締め括り役として責務を果たしていないと言われるでしょうし、もう少し長く話せば皆さんを退屈させてしまう危険があります。そこにはかなり複雑な使命があり、私は審査員長であると同時に審査される側でもあるのです。さらにもし私が[私に捧げられた]今日の研究集会の開催は正しいことだったといえば顰蹙を買うでしょうし、開催は間違いだったなどといえば、さらに顰蹙ものでしょう。いずれにせよ、その人物なしには本日の集会が実現できなかった「要（かなめ）」の役割を果たした、名前を挙げることを拒否された方に感謝したいと思います[2]。皆さんは私の名誉の会だと言いました。私は確かに皆さんが私に名誉を捧げてくださることには感謝いたしますが、他の多くの人たち（私の世代のと言うべきでしょうか）と同じく、自分以外に捧げられる場合を除いて、私は名誉というものが好きではありません。今日の主題はただ単に人文諸科学の中での言語学の位置というものでした。それこそが私たちが、その私たちが誰であれ、残したかったことです。そこでまず、午前中の発表に関して気づいたことを逸話的に二、三申し上げることをお許し願いたいと思います。

学問間の関係

何よりもまず歴史です。一つ一つの発表の後で、発言を求められる機会に応じてすでに本質的なことは申し上げましたが、さらに固執する価値はあります。歴史は、ゲルマン諸語の歴史を専門とする文献学者として活動を始めた私にとって、言語学の重要な構成部分でした。イタリアの言語学者たちのように、人は歴史的＝自然的な諸言語について語るとき、極めて重要な特徴を強調することになりますが、言語活動は常に、その自然性（定義しなければならない言葉ですが、私は注意せずに使っています）と、一方における［言語］グループとしての結束性と、他方における一つの文化、概念的な表象、言説的な実践そして修辞学を通じて現れる文化（この文化は常識と混同されてはなりません）へとつながっていくその歴史性との間で把握されます。一言で言えば、通時と文化人類学を持たない言語学は理論的停滞を宿命づけられています。

私の研究には哲学が常に重要な役割を果たしてきました。それゆえにジャン＝トゥッサン・ドゥサンティによる発表が予定されていたのです[3]。彼の不在は出席者全員が残念に思っていますが、彼が象徴するものは、『数学的理想性』から『時間についての省察』に到るまでの著作により、その不在を超えて残されています。シルヴァン・オローが模範的なやり方ですぐさま彼の代理を務めてくれました。彼が言語学をエピステモロジー的貧困から救ってくれることを期待します。哲学的不安は常に私の頭から離れたことはありません。バカロレアで私は自分には理解不能だった問題を選択しました。私は避けがたかった「汝自身を知れ」を選ばず、「個人的アイデンティティ」を選んだのです（！）。当時私はこの意味が理解できませんでしたが、この小論文、むしろそのテーマは、私の人生に長く付いて回りました。私が（ジャン・ラクロワのもとリヨンで[4]）高等師範準備級にいた頃、否定についての小論文が出され、私はそれにとても影響を受けました。私はその試験で良い評価を受けることが出来ました。そしてラクロワは絶えず、キュリオリはスピノザだ！と触れ回っていたのです。私は彼がスピノザはキュリオリだと言わなかったことに感謝しなければなりませんが、それは脅威ともなったので

す。その結果とても自然に私は様々な哲学者の中でも特にスピノザの研究、そして否定の研究へと入って行けたのです。1945年2月の高等師範学校の入試の口頭試験では「精神とは何か？」という問題が出されました。思い出すに、私は『創世記』の冒頭部分から口頭発表を作り上げました。以上が学校での折々の思い出を通しての「神のお導き」の痕跡です。

以上は冗談としても、私はすぐに二つの明白に哲学的問題に直面しました。(1) 言語学の対象とは何か（どのように言語活動と諸言語との関係を定めるか)、(2) テクストの物質性と主体間の意味活動の非物質性との関係をどのように取り扱うことができるか、という問題です。私にはいくつかのエピステモロジー的な歯止めが必要でした。なぜなら当時の私は、メタ言語的方法を構築するかわりに、正体不明の素朴な哲学になりかねない、雑多な理論化にはまり込む危険があったからです。しかしまずなぜ言語活動（ランガージュ）なのでしょう？　大まかな特徴を要約させてください。私は文献学の教育と大体において構造主義的だった言語学の教育を受けました。すぐに私は分類学的な言語学を窮屈に感じ、他の分野の研究者たちと、しばしば彼らの求めに応じて、しかし私としても記述言語学の還元主義を受け入れられないという理由のために、関わりをもちました。自分が閉じ込まれている枠組みを壊したいと悩みながら、私は外部の立場を築く必要性、あるいはそれまで私に遺贈され、教育されたものとは異なる言説を生み出す力を獲得することの必要性を感じていました。私に欠けていたのは、真の理論構築が可能となるような手順、概念および構築的様式を用いて、抽象的言語を構築する自由でした。論理学者＝数学者＝情報科学者と議論し、哲学者の批評（ここでルイ・アルチュセールへの感謝を述べさせてください）に晒されながら、失語症患者（H. エカーンとR. アンジュレルグとの共同研究[5])、あるいは統合失調症患者の言説を前にして（J. ラプランシュとの共同研究)、当時の私の出来の悪い説明に恥じ入りながら、私の抱いた力不足という強い意識は、人文科学の中でパイロット・サイエンスと呼ばれ、勝ち誇っていた言語学の中で私が感じた不満へと変わっていきました。そこから新しい現象の発見や、説明できない問題群を前にして、今まで築き上げられてきたあらゆる建築物に激震が走り、多様性（ディヴェール）、

間主体性（アンテルシュブジェクティフ）、異質性（エテロジェーヌ）を、一貫性があり明示的かつ客観的なメタ言語を通じて解明しなければならないというこの学問固有の複雑さの発見がありました。極めつきの難問という状況でしたが、厳密性と想像性が要求される大いなる魅力もあったのです。メタ言語的表象システムを用いて、表象と接近不能な心的操作（オペラシオン）という現実（レエル）をそれと関連づけながら、様々な言語とテクストおよび状況の経験的豊穣さを理論化するといういささか狂気じみた野心に導かれていたのです。

このわずかばかりの思い出語りを続けていると、私は自分の教育の早い段階から大きな役割を演じたある人物の名前を想起したくなります。形式面でのかけがえのない案内人（調教師というべきでしょうか）だったロジェ・マルタンについて、私は語りたいと思うのです[6]。彼は苦行僧のような人物で、私があるとき、もしかすると彼が論理学において行っていることは私が言語学において行っていることと何か関係があるのではないかと思い、そう質問したところ、その考え自体が彼を激怒させてしまったほどでした。ですがこの絶えざる厳密さへの固執が私にとっては非常に貴重でした。なぜならばそれが私を、誤った学問的借用と、特定の計画の厳密さよりも効率が勝ってしまう偽の技術性への誘惑から守ってくれたからでした。認知心理学の分野については、フランソワ・ブレッソンに出会う前に私はピエール・グレコを通じて発見していました[7]。彼は文化教養が高く、精神の活発さを持ち、誰もが彼を前にするとぼんやりしてなどいられないと思う人物でした。彼は私を愚言と学際的研究の［陥りがちな］妥協から守ってくれました。これら全ては、午前の部がその構造自体から意義深かったと言うためです（少なくとも私にとっては、他の方々にもそうであって欲しいと望みますが）。午後の部についてはまだ語りません、あまりにも最近ですから。

私が言語学を学び始めた頃の社会状況について気づいたことを通じた逸話的な振り返りを続けてもよろしいでしょうか。私は確かに荒っぽくはありますが、いかなる苦々しさもない言葉で当時の私の状況を要約したいのです。私はあえて孤独（文学者の中の言語学者としての）と、軽蔑（人間としての私に対してというよりは、私が代表していたかもしれないものに対しての）と

いう言葉を使いたいのです。軽蔑にはいくつかの段階がありました。この学校の中でさえ、古典語研究者たちによる、ラテン語が得意でありながら、英語の高等教育資格試験の準備を始めた者に対しての。そして英文学者の中では、先程言ったように、言語に興味を持つ者に与えられる無理解でした。それら全てが刺激にはなったのですが…。

もう一つの特徴（それは未だに継続しています）が、［パリ］言語学会に入るや否や、私を打ちのめしました。それはある種の儀式化された展開に関するものでした。誰かがある言語のある現象について発表をします。質問者が次のような発言をします。「私の研究している…語では違います」他の質問者が「私の研究している…語では同じです」そしてそれがこの種の会話の究極的手段である終了時間が来なければ永遠に続くであろう独言の並列と雑駁な議論からなる一種の調和的誤解の中で続いていくのでした。その結果、私たちの中に、深い理論的な不満が生じて来るのです。この不満は、記述に関する不満を伴った理論的な不満だったのです。なぜなら記述の大部分は（特に研究されている言語や、また逆にあまり研究されていない言語でも）確立された手続きに基づいて行われており、ある種の方法論的な手引書を使用しながら、非常に重要な幾つかの問題を置き去りにするものでした。（私たちは皆、この種の経験を遅かれ早かれ経験していると思います。）言語学は目的と方法論を備えた自律性を模索していました。もちろん、私たちは可能なことをしていたにすぎず、諸言語について表面的な視線を向けていただけという印象を持っていました。またすでに言ったように、構造主義は私をすぐに退屈させました。なぜならば、そこには一種ののんきな確実性により、様々なレッテルやテクニックの使用、レッテルとその関係づけ（私は心的操作、構築、カテゴリー等について語っています）、つまりメタ言語的作業との間に絶えざる混乱があったからです。そこからエピステモロジーの領域で、当惑するような無邪気さが出現していました。同様に、それはすべてを固定化してしまう極端な階層化にも関係していました。確かに、無媒介的構成物（線的シークェンスへの部分的秩序の投射）における分析の発見の重要性をいくら言っても言い足りませんが、同時にこの無媒介的構成物における分析は結局は妨

害的な要素だということが明らかになってきました。ところで、構造主義の内側には、差異の概念が盛んに使用されていました。そしてそれは単純な弁別的な見方、例えば単純な二項対立、素性の「+/-」に還元されていました(残念ながら今でも還元され続けています)。あらゆるものがそこでは固定化し、分類的枠組みに還元されていました。そこでは移りかわり、程度(グラディアン)の違い、つまりあらゆる変調(モデュラシオン)とテクストの可塑性(プラスティシテ)が消滅していました。変形可能な形式の代わりに、可変性(ヴァリアシオン)や調整(アジュストマン)が禁じられた厳密な集合がありました。

ところで私はその当時、イエルムスレウとコンタクトがあったのですが、彼は一定程度の数の言語にしっかりとした知識を持っており、同時に理論化志向があり、経験的な細部を脇に追いやりながら足場作りをしていました。パリにいたデンマーク人の同僚を介して、このグループの研究成果を受け取っていましたが、それが届くたびに、図式は正反対になるのでした。情熱が注がれた試みに文句をつける意図はありませんが、この研究グループから受けた印象の記憶を辿れば、明示的な仮説も、確認の手続きも経ないレッテルの戯れのように思われ、私には満足のいくものではなかったのです。そしてそのことが私の厳密な理論への要求、公理化のいくつかの形式に関する疑念、接近不可能な心的操作(オペラシオン)の痕跡としての、顕微鏡的な細部から出発するという思いを強めたのです。

言語活動と諸言語との関係

私の研究は、このようにして後に再び語ることになる二つの根本的な問題を巡って展開されました。最初の問題は最重要なもので、言語活動と諸言語との関係です。私は、当時対照言語学と呼ばれていたものと、教育に適応された応用言語学に興味を持っていました。私はしたがって言語の多様性(少なからず制約のあるものですが)とその比較可能性に直面していたのです。どのように対照言語学を行うか、つまりどのように観察を行い、観察可能なものの理論をどのように作り上げるか、どのようにデータを対照可能なやり方で共通のフォーマットに還元できるかについて、です。もしこの二つの問題(観察可能なものの理論と比較可能性の理論)が解決できなければ、ある言語

から別の言語への推移を扱うことができないことは明白です。並行して、私は言語学の術語で、（ソシュール的な意味での）「ラング」、あるいは［その複数形である］（実証的データとしての）諸言語（デ・ラング）のために避けられる傾向があった言語活動（ランガージュ）の問題を提起しようと考えました。一方で人々は、理想化された表象に訴えることで間主体性を抹消でき、他方では、象徴活動の現実を、歴史なしのテクストに還元できると信じていました。起源の問題もなく、主体間の駆け引きや調整もなく、解釈学的余剰として以外は意味論もない、つまりそれは夢に過ぎなかったのです…。同じ時期の少し後で、高等師範の学長（ジャン・イポリット）と高等教育長（ピエール・エグラン）から、二つのセミナーを作るよう依頼されました[8]。それは文学者のための数学と数学者のための言語学でした。私は言語学のセミナーを創設する担当でした（もう一つのセミナーは結局作られませんでした）ので、私のセミナーは理系と文系の両方を受け入れました。私はこのようにして次の問題の前に立たされたのです。言語学を専攻する人々と言語学を専攻しない人々の要求を満足させるメタ言語的表象システムをどのように作るべきか、という問題です。そのような場合には、言語の多様性と、話し手－聞き手である主体としての私たち固有の表象活動、そして言語－言語活動との関係に取り組んでいる言語学者としてのメタ言語的活動とを関係づけることは避けられなかったのです。それらすべては、今となっては平凡に見えますが、当時としては新しかったのです。

今日の午前中にバスに乗り込むポワンカレの話がありましたが、私に関して言えば、デュサヌ教室の前を通る廊下が同じものだったと言えます[9]。その時私に突如としてある考えが浮かんだのです。「言語活動の理論と言語の多様性の理論との間の関係の問題を提起しなければならない」、それが一番最初の段階でした。私は言語学にとっての理論とは何かを考えました。観察可能なものの理論、有効性の証明を受ける仮説の集合、堅牢性、自己修正性、改善の領域を備えた明示的なメタ言語表象のシステムの構築、この美しい明晰性は一度にやって来たわけではありません。私が言いたいのはつまり、私が質問攻めにした多くの人々がいなければそれは絶対に可能ではなかったと

いうことです。最初の教訓としては、あなたに何も直接的には伝えてくれるわけではない別の領域で実績のある人たちと仕事をせよということです。言い換えれば、言語学を接触の場と考えるべきです。誇り高い砦のような独立性をあまり主張してはなりません、たとえそれが言語学者の生活を複雑なものにしたとしても。

言表（エノンセ）

この言語活動（ランガージュ）への深い思索から、構造主義的な形態統辞論的分析を越えようと欲するとすぐさま、「文」という概念の妥当性に疑問が生じました。逸話としてですが、それは地方のある講演会の際だったのです。私は比較的大きな街で、文学作品の分析と言語学の関係について語るのを聞きに来ていた三百人ほどの大きめの聴衆を前にしていました。しかし私はそれを行う代わりに、(それが初めてだったと思いますが) 言葉の規範的な意味では文とは言えないにもかかわらず、統辞論的に完成された文とは別の制約に支配されている日常言語の言表（エノンセ）から成るテクストを取りあげたのです。それは後に有名になった「うちの、父、自転車、ハンドルがクロームので、出かけた」でした[10]。このようにして、「言表（エノンセ）」の概念の理論的探求と、文を正しく作る規則とは異なる原理、言表としてのすわりの良さの発見が始まったのです。言表の発見とともに、間主体関係の問題と［言表の］生産と認識の非対称性という根本的な問題が現れました。私はしばしばそのことを言ってきましたし、今なおそれを繰り返していますが、私たちは言語活動を、かわるがわる一方が発信し他方が受信するという、その名が示すような、発信者と受信者の間のブラックボックスに還元する単純化されたモデルには満足してはならないのです。私は哲学を学んでいたので、これはモナド＝主体間の予定調和を前提にしていると直感しました。だとするとコミュニケーションは前もって定められた情報の伝達に還元されてしまい、私たちは、変調（モジュラシオン）も適応性（アダプタビリテ）も何もない、あらかじめ切り取られた世界と関わっているかのようになります。ところで、コミュニケーション活動がありうるという事実は、それとは逆に、調整（アジュストマン）や、私の話を聞く多くの人たちにめまいを与える「留め具（ブックル）」の概念の存

在を前提とします。すなわち、テクスト的連鎖の主体による、このテクスト的連鎖が他の主体にとって解釈可能なものとして知覚される、つまり走査（バルクール）の最後において、あるやり方あるいは別のやり方で解釈されるために[言表（エノンセ）が]生産されているということを意味するのです。

こうして言表とともに、私たちは当時存在していたコミュニケーションの図式を破壊しようとしました。同時に私たちは主体間の非一致の問題を提起しました。私が体系的に «langagier（言語活動的な）»、«linguistique（言語的な）»、«métalinguistique（メタ言語的な）» の違いを導入したのは1965年でした。trans-individuel（超個体的）とintersubjectif（間主体的）との違いの区別も同時期でした。もしtrans-individuel（超個体的）しかなければ、変異（ヴァリアション）と調整（アジュストマン）が消し去られることになるでしょう。そしてもしintersubjectif（間主体的）だけしかなく、trans-individuel（超個体的）な安定性がなければ、コミュニケーションは不可能となるでしょう。したがってこの変形可能（デフォルマブル）な安定性と、常に調整（アジュストマン）と失敗（ラテ）を通じた発話的戯れにより安定化されるこの可塑性（プラスティシテ）を基礎づけるためにはさらなる概念が必要でした。この時私はストア派の「レクトン（lekton）」を応用した「レクシス（lexis）」という概念を導入しました。この概念により、私は発話的交換を抽象的で物質的な形式の構築と再構築の問題へと帰着させました。そうなれば言語学者の仕事は言表（エノンセ）を解釈可能なものにする諸条件に関わることになります。私たちはこの角度から、発話可能な言表の部分集合としての不可能な言表の文法を構築するという理論的逆転へと導かれました。さらには等価性（エキヴァランス）の問題が提起されるに至りました。なぜならば、レクシスからはパラフレーズ可能な表現群が、また変調（モデュラシオン）とともに注釈（グローズ）が引き出せますが、最もシンプルな形式の変調（モデュラシオン）は、以下の疑問に対応しているからです。「それは同じ意味なのか？」「それは異なるのか？」そして「それは誰にとってそうなのか？」という。

その結果として、言語活動/諸言語の関係と言表（エノンセ）の概念は、私たちを言語学における不変性（アンヴァリアン）と可変性（デフォルマビリテ）という核心的問題に引き寄せます。最終的に複雑な現象についての動的なシステムを構築することが重要となります。私の考えでは、誰も動的なシステムを構築することは好みません。なぜならば

それは非常に複雑だという理由によってです。*Theory of Games and Economic Behavior*『ゲームの理論と経済行動』（パラグラフ4.8.2.）の中で、モルゲンシュテルンとフォン＝ノイマンは、動的なシステムは美しいが、より複雑なので、うまく機能する静的なシステムを構築しない限り、動的なシステムへの移行は難しい、と言っています[11]。動的なシステムの構築を拒否すること、それは単純化された（理想化された、とも確かに言えば言えるでしょうが、理想化の基準は示されないままです）データに満足することです。それは幾つかの現象は研究の領域に入らないと見なすことにつながり、少なくとも一時的には（このような約束は同時に永遠の別離でもあるのです。しばらくの間はお待ちください、何年後、何ヶ月後には、このような問題を扱います、ということがよく聞かれます）。あるいはむしろ次のようにも言います（そしてそれは私の立場でした）。（1）私たちはテクスト（資料）を持っている。（2）私たちは、ある種の方法から出発して、見いだされるもの、すなわちあらかじめ除外されていない経験的なもの全てを「扱う」以外に方法はないのです。幾つかの場合において、そうすることは稀ですが、以下のような問いを立てることができます。良い結果が出ないのは理論的（あるいは方法論的）不十分さから来ているのか、それともそれは解決法のない問題であるという事実に関係しているからなのか（いずれにせよ、全てが均質なわけではなく、全てが解決可能でもないのです）。つまり、理想化であろうと、メタ言語的調整であろうと、問題の放棄であろうと、それを正当化する理論的な基準が与えられなければならないのです。ところで、今に至るまで、言語学者から、ある道を遠ざけた理由を理解させてくれる説明を受けることは稀でした。繰り返しますが、理想化の問題は、憲兵隊においてではなく、科学において重要な問題なのです。私は、理想化された対象を構築するとアプリオリに言っておきながら、ジェラルド・エーデルマンの『脳から心へ－心の進化の生物学』[12]の表現によれば「過剰な理想化」があったと認めるようなことは避けたいのです。

私が歩んできた道のりの第三段階に移りましょう。ついでに申し上げると「段階」を語るということは、三つの段階があると宣言しているかのようであ

り、またその中に見事な一貫性があると主張しているようである限りにおいて人工的な言い方です。実際それら全てはしばしば行き当たりばったりであり、あるいは単に絶望のエネルギーに由来しています。この第三の段階は一つの問題、いかにして言語学者は自らが操作する対象を構築するのかという問題に帰着します。このような問題は、私たちは全てがあらかじめ構築された諸対象に関係しているわけではないということを前提とします。より正確に言ってみましょう。どのようにして私たちは、言表（エノンセ）を構築できるようなやり方で以下に述べる諸対象を浸らせる空間を構築するのだろうか？ということです。これらのメタ言語的対象（つまり私たちがそれなしには済ませられない理論的構築物）のうちで、私は「原初的関係（ルラシオン・プリミティヴ）」「レクシス」「概念領域（ドメーヌ・ノーショネル）」（文法的あるいは語彙的）カテゴリーに関係する「マーカー」の戯れ、起源とパラメターを備えた「参照空間」を挙げるでしょう。言語的操作の中で、これらの対象を構成する操作とは別に、私はレクシスをある参照空間に浸らせる幾つかの操作を区別するでしょう。言表（エノンセ）とは、最終的にはそれ自体調整された参照空間に位置づけけられているレクシスの図式のインスタンス化の結果生じるものです。一般化して言えば、私たちは言表（エノンセ）の構築を（1）概念（ノーション）と概念の出現事例（オキュランス）との関係づけ、（2）標定操作（ルベラージュ）のシステムとの関係でのこの出現事例（オキュランス）の定位、へと帰着させることができるのです。

このようなやり方はまず何よりも、言語学において様々な「問題」を作り出します。問題を作り出すということ、それは、観察可能なものを活用して、ある観察から別の観察へと移行する問題が提起されるように、観察の諸集合を作り出すということです。例えば、似たような言表の集合の中で、不可能なシーケンスがあるとしても、カテゴリー的マーカー（モダリティ、限定辞、態（ヴォイス）、等々）、周辺環境あるいは韻律（プロソディー）を変化させると、なぜ再び可能となるのか、その理由を理解できるかが問題となります：

j'aime le café	*je bois le café*
（私はコーヒーが好きだ）	（私はコーヒーを飲む）
* *j'aime du café*	*je bois du café*
（*=不可能な言表）	（私はコーヒーを飲んでいる）

j'aimerais du café
（私はコーヒが欲しい）

** je boirais du café*
（*=不可能ではないがすわりの悪い言表）

je boirais volontiers / bien / facilement du café
（私はコーヒーをよろこんで / 是非とも / すすんで飲みたいものだ。[13]）

このやり方によって、様々な一般化に到達でき（そこにあるのが諸問題なのです）、またそれに基づいて推論が可能となる、観察される現象についてのメタ言語的表象に到達することができるでしょう。

私たちはここで言語活動（ランガージュ）（したがって諸言語）と認知との関係の中心的な問題の一つに到達します。実際、上で素描された方法（様々な問題、推論、ローカルな理論とグローバルな理論）こそが、メタファー的飛躍（脳をコンピュータに見立てるような）についてではなく、また経験的データとは関係を持たない、誠実であるためにはあまりにも美しすぎる構造物についてではない、現実についての有意義な議論のみを可能とするのです。つまり推論を構築するのではなく、問題を構築する術を学ばなければならないのです。言い換えれば、問題がしっかりと作られているか、その推論が確実な推論かどうかを見ることを可能とする有効化の手続きを検証し構築する術を学ばなければならないのです。したがって私たちは二つの局面において機能する対処法を持つのです（そしてこのことは極めて重要です）。一方で、言語学者は「細部の分析」を遂行しなければなりません。巨視的な分析など存在しません。冠詞のある言語があり、冠詞のない言語があるということは意味を持ちませんし、有効でもありません、なぜならば、いずれの場合にせよ、異なるマーカの背後に、幾つかの心的操作（オペラシオン）を見出すことができるからです。またいずれにしても、「冠詞」はあまりにも一般的な術語であり、妥当性がありません。私たちは「一般的なもの」と「一般化可能なもの」を混同してはなりません。他方で、メタ言語的構築主義と呼びうるものを用いて、観察を表象すること、つまり推論すること、が可能となるような問題を打ち立てようとしなければならないのです。

私はフィールドの言語学者たちが、最初は「理論的なもの」（彼らの気持ち

も理解できます。何故ならば、「理論的なもの」はテロリズム、そしてはるかな上空からの見方にしばし似ているからです）を恐れていながらも、彼らが研究していた諸言語が（とりわけアフリカ諸語の領域で）教育言語になろうとするに到って、私が素描したこの種の方法、すなわち、非常に大きな複雑性を備えた現象を知覚していたために、誰一人として満足させないあまりに大雑把な記述に満足するのを禁ずるやり方、に近づいてきたことに勇気づけられたのです。さらに、「食べるほどに食欲は湧いてくるもの」です。人は、解決された手続きによって明らかにされる興味深い現象の塊を意識すると、決してやめられなくなくなるのです。説明する欲望の限界を定められないのと同じように。こうして顕微鏡的な記述と理論化との相互作用という大いなる夢が現実のものとなるのです。

何が結論となるでしょうか？（1）まず第一に、言語学は、もしそれが言語活動と諸言語を対象とするものならば、それが学生に与える教育の面においては、言語学を超えた教養を与えるべきです。私はかつて広い教育が良いか狭い教育が良いかという多くの議論に参加したことがありました。私の立場は極めて明確です。私たちに必要なのは広い教育です。(2) 第二に、言語学は目的とプログラムを持たなければなりません。(3) 最後に、このプログラムは監視と検討の下に置かれなければなりません。実際、理論的な計画を持つことは現実から離れることではなく、現実へと立ち戻らせることなのです。

これら最後の考察が、感謝の言葉となりまた、その豊穣さが私たちに言語活動と諸言語の多様性の言語学、不変性（アンヴァリアン）と可変性（ヴァリアシオン）、観察と推論の言語学への希望と要求とを維持することにつながる本日の研究集会を閉めくくる言葉として役立てば良いのですが。それはひとつの科学となることが出来るのでしょうか…。

（伊藤達也 訳・註）

註

[1] Antoine Culioli (2018) “En guise de clôture”, *Pour une linguistique de l’énonciation*, Tome IV, *Tours et détours*, pp.13–24, Lambert Lucas, Limoges. (pub. orig. Stéphane Robert (éd.) *Langage et sciences humaines: propos croisé*, Peter Lang, 1995, pp. 145–160.) の全訳である。翻訳許可に関してはLambert-Lucas社とStéphane Robert氏に感謝する。本文中に述べられているように、この「閉会のことば」に先立ち、1992年12月11日、パリの高等師範学校で『諸言語と言語活動：アントワーヌ・キュリオリへのオマージュ』と題された研究集会が開催された。この「閉会のことば」はこの研究集会の終わりにキュリオリが語った言葉を記録したものである。[　]内の言葉は原文にはなく、理解のために翻訳者が加えた部分である。原文でイタリックは「　」で表示した。

[2] この文章が最初に出版された論集 Robert, S. éd (1995) の編者ステファンヌ・ロベールを指している。彼女は訳者からのメール質問に対しキュリオリの退官を記念して彼女一人でオマージュの企画と開催を取りしきった（「誰も助けてくれなかったのです、本当に誰も！」）とのことであった。退官を記念するこの研究集会では単にエノンシアシオンの言語学の概要を伝えることよりも、むしろキュリオリの知識人としてのバックグラウンドの学問的多面性を紹介することを目的としたと語っている。そのためにキュリオリの指導学生であった彼女自身は完全に「陰に隠れ」、論集にはジャック・ルゴフ（歴史学）、ジャン・ラプランシュ（精神分析）、フランソワ・ブレッソン（心理学）、ジャン＝ブレーズ・グリーズ（論理学）、ベルナール・ヴィクトリ（情報科学）、などが登場している。この人選に関してははS.ロベールがキュリオリに知的交流のあった人たちの名前を聞き、多くの名前が挙がった中から時間的制約の関係で数名に絞って招待したとのことだった。ロベールによれば指名された人は多く、かなり制限をしなければならなかったとのことであった。「閉会のことばにかえて」はこのような研究集会を締めくくる目的で即興的に発された言葉を記録したものである。Culioli の全集の第２巻に *Bribes d’un itinéraire*（「過去の断片」）として縮約版（ロベールによればおそらくはJanine Bouscaren がキュリオリの監修のもとで編集したに違いないとのこと）が掲載されていたが、全集の第４巻が2018年に出版された時、完全版が収録された。本稿はその完全版の全訳である。ちなみに本稿の註は11（オリジナルの註1）を除きすべて訳註である。

[3] Jean=Toussaint Desanti（1914-2002）はコルシカ出身の哲学者、科学史家。同郷のキュリオリの友人でもあり、企画者のS.ロベールによると研究会に招待され、出席してはいたが、理由は不明ながら口頭発表はしなかったようである。この集会に参加したD. Paillard によると、健康上の理由だった可能性が高いとのことである。

[4] Jean Lacroix（1900-1986）哲学者、哲学教師、ジャーナリスト。キュリオリが在籍したリヨンのリセの高等師範準備級で哲学教師を務めていた。

[5] Hénri Hécaen（1912-1983）精神分析家、神経心理学者。『神経心理学入門』（1972）左利きと脳の局在化の関係の研究等で知られる。René Angelergues（1922-2007）精神分析家。

[6] Roger Martin（1920-1979）フランスの論理学者。『現代論理学と形式化』（1964）でジャン・カヴァイエス賞を受賞。1976年にフランス論理学会を設立した。

[7] Pierre Gréco（1927-1988）

[8] Jean Hyppolite（1907-1968）フランスの哲学者。ドイツ哲学、とりわけヘーゲル哲学の研究紹介により戦後フランスの主要な哲学者を育成した。1954年に高等師範学校学長に就任、1963年からコレージュ・ド・フランス教授。死後に弟子であったミシェル・フーコーがコレージュでの講座を継承した。Pierre Aigrain（1924-2002）フランスの物理学者、科学アカデミーの研究秘書。ジスカール・デスタン時代の科学省事務次官。

[9] 高等師範学校内にある教室の名称。

[10] フランス語原文では、“moi, mon père, son vélo, le guidon, le chrome, il est parti”［私、私の父、彼の自転車、ハンドル、クローム、彼は出て行った＝私の父はハンドルがクロームの自転車で出て行った］書き言葉の文法からは逸脱しているが言表としては自然で完全に意味が理解出来る。

[11] John von Neumann & Oskar Morgenstern, *Theory of Games and Behavior*, Princeton University Press, 1953, § 4.8.2.

[12] Editions Odile Jacob. Paris. 1992 (traduction française de *Bright Air, Brilliant Fire : On the Matter of Mind*. Basic Books. 1992) オリジナル版の註1。

[13] 言表の意味を表す（　）内の日本語は訳者によるものである。

「私はコーヒーを飲む」と訳した*je bois le café*だが、この日本語はやや曖昧であり、原文には2通りの解釈が可能である。(i)「私は［紅茶ではなく］コーヒーを飲む」この場合は、定冠詞*le*の対比的解釈である。(ii)「私はそのコーヒーを飲む」この場合は、定冠詞*le*の指示的解釈である。

2つの程度の違いを含む不可能な言表は意味を構築できないために日本語訳をつけられないがどこがおかしいのか以下に若干の説明を試みる。

言表**j'aime du café*が不可能な理由は、*aimer*の直接法*j'aime*が部分冠詞を含む目的語*du café*と共起不可能だからであるが、動詞を条件法に変化させ*j'aimerais*とすると途端に*du café*と共起可能となり、発話可能な言表として「私はコーヒーが欲しい」という意味を構築する。

他方、動詞*boire*は定冠詞および部分冠詞付きの目的語とは共起可能であるが、動詞を条件法に変え、**je boirais du café*とすると、途端にすわりが悪くなる。その場合何かが欠けているという印象が母語話者には生じるため、副詞*volontiers*, *bien*, *facilement*のいずれかを追加すると、言表としてはすわりが良いくなる。この場合に副詞が果たす役割についてはここで論じられていないが、他の論文では論じられており、端的に要約すると、条件法が架空の参照点（ルベール）を要求し、副詞がこの追加要素の構築を可能にするためである。このような追加要素は副詞の追加だけでなく、単純動詞の再帰動詞化や人称の変化、形容詞の付加などによってももたらされうる。

このような「不可能な言表の文法」はキュリオリの言語理論最大の特徴となっているが、方法論的著作の翻訳という本稿の位置付けのためこれ以上の説明は別稿に譲ることとしたい。

例として挙げられた言表の日本語訳にはFrance Dhore、青木三郎両氏の協力を得た。ここに感謝の意を表する。なお原稿に過りがあればその責任は訳者にある。